

## 第1章 科学と神学

キリスト教神学・信仰の根幹は、「キリストが、聖書に書いてあるとおり私たちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと」とパウロが語っているように（コリントの信徒への手紙一15章3〜4節）、イエスが私たちの罪のために死んだあと、3日目に復活したことにあります。

科学によれば、死者を3日間も放置すると腐敗が進み、命が生き返ることなど、あり得るはずもありません。しかもイエスだけではなく、私たちと同じ人間として描かれているラザロなどにおける、死者の復活も記されています。5つのパンと二匹の魚で、五千人の人が養われたということも、四つの福音書には全て記されています。このように、聖書には、科

小山清孝（おやま・きよたか）

福岡県出身（1943年生）；九州大学工学博士、ブリティッシュ・コロンビア大学 Ph. D.（化学）；トロント大学博士研究員を経て、日本の民間化学会社に就職（探索研究所長、法務・特許部長、ファインケミカル事業部部長等を歴任）；（社）日本化学工業協会にて国際業務室長（WTO、自由貿易協定等に関わる国際貿易；国連（ILO、IMO等）、OECD、ISOにおける化学品の安全管理に関わる国際調和等）；経済産業省貿易政策小委員会委員、経団連貿易と投資委員会委員、OECD産業諮問委員会委員、APEC化学産業部会委員等；“Enzyme Engineering 7”（The New York Academy of Sciences, 1984）、“Biocatalysis in Organic Media”（Elsevier, 1987）、“Biocatalytic Production of Amino Acids and Derivatives”（Hanser, 1992）、“Chirality in Industry”（John Wiley & Sons 1992）等、化学に関する論文・総説・著書（共著）多数；小説「黎明よ疾く覚めて闇を打て」（ペンネーム：仰木望、文芸社、2007）、船本弘毅編著『希望のみなもと一わたしを支えた聖書のことば』（ヨベル、2012）、『創造か進化か——我々は選択せねばならないのか』（ヨベル、2020）；山口大学工学部非常勤講師；リーゼント・カレッジ客員研究員（科学と神学）

ヨベル新書 058

今、よみがえる創世記の世界  
——進化論と聖書との対話

2020年7月15日 初版発行

著者 — 小山清孝

発行者 — 安田正人

発行所 — 株式会社ヨベル YOBEL, Inc.

〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F

TEL03-3818-4851 FAX03-3818-4858

e-mail : info@yobel.co.jp

印刷 — 中央精版印刷株式会社

配給元 — 日本キリスト教書販売株式会社（日キ販）

〒162-0814 東京都新宿区新小川町 9-1

振替 00130-3-60976 Tel 03-3260-5670

©Kiyotaka Oyama, 2020 Printed in Japan ISBN978-4-909871-15-2 C0216

聖書の引用は、聖書新共同訳（日本聖書協会刊行）による。

JASRAC 出 2005524-001

学的見地から到底あり得ないことが、堂々と記されています。

これでは、一般のキリスト教未信者の方にとっては、いかにも不思議で、キリスト教は理解し難い宗教だと言われたとしても、決しておかしくはないでしょう。これは、何も未信者の方だけの問題とは言えないでしょう。多くのクリスチャンにとっても、科学と聖書の関係は最も悩ましいものの一つではないかと思えます。

本書では、このような科学と聖書の関係について、その中でも最も多くの関心もたれたいる進化論と聖書の関係を中心に、いろいろと考えていきたいと思えます。

このような議論をするにあたって、聖書とは、どのような文学様式で書かれている書物なのか、そのことについて、まず考えていきたいと思えます。

### (1) 聖書の文学様式

聖書は、旧約聖書39巻、新約聖書27巻の全巻66巻からなっています。

もちろん、著者がいます。マルコやその他による福音書のように、著者が判っているものもありますが、著者が判っていないものも数多くあります。この分厚い聖書は、旧約から新約まで、時間的には紀元前から紀元後まで、千年を優に越える長い時代にわたって無名の著

者を含めて、数知れない多くの著者によって書かれたものですが、これらは揺るぎのない一貫した思想のもとに書かれています。このことは実に驚くべきことと言わざるを得ないでしょう。このことが、それぞれの著者の背後には神がおられ、その神の霊によって彼らは聖書を書いたとされる所似です。よって、キリスト者は、そこに書かれたものを神の言葉として受け入れています。

このように、キリスト者は皆すべて、聖書を「神の言葉」として受け入れています。その受け取り方は一様ではありません。このことが大きくは教派を生み、さらには同じ教派、同じ教会の中においてさえも、個人の間でその受け取り方は様々に異なっているのです。このことは、同じ小説を読んでいながらも、その受け取り方が、その読み手によって一様でないことから理解できるでしょう。

しかし、たとえその受け取り方が異なっているとしても、「神の言葉」を信じる者は皆、イエスの愛でつながれた家族なのです。

聖書を文学様式・記述様式の観点から見ると、聖書が実に様々な様式で書かれていることに気付かされます。例えば、民数記は統計データであふれており、現代の国勢調査報告さながらです。

私は企業で一時、法務関係の業務に携わっていましたが、申命記は、いかにも現代のビジネスにおける契約書のように思われました。契約概念が発達した欧米の企業法務担当の方にそのようことを話すと、まさに、申命記こそが、その原形だと言われました。

もつとも、旧約、新約——つまり、古い契約、新しい契約——という名前からわかるように、聖書全体が、壮大な神による私たち人間に対する救いの契約書なのです。しかも、その契約は、人間には何ら義務を課さない神からの一方的な救い・恵みの契約、つまり、救いに与った人間からの自発的な応答を期待するだけの、法務的には片務契約(契約の当事者の一方のみが義務を負うこと)と呼ばれるものなのです。レビ記には律法・規則が細々と書かれており、まるで六法全書を読んでいるかのようです。

歴代誌や列王記は歴史書、詩編や哀歌はその言葉の通り詩歌(讚美歌)、サムエル記は伝記、箴言は格言、イザヤ書やエレミヤ書などは預言書、ガラテヤの信徒への手紙などはそのタイトルが語る通り書簡、パウロによるローマの信徒への手紙は、書簡という形式を取っていますが、一方では神学論文とさえ見なされています。ヨハネの黙示録は、黙示的記述と呼ばれる、そのまま読んでも何が書いてあるのか理解できない、聖書独特の様式が取られています。

その他にも、イエスが語ったような多くの譬え話もあります。その中でも、イエスの放蕩息子の譬え話は、世界で最も優れた短編小説だと、芥川龍之介が激賞したことはよく知られている事実です。

このように聖書はあらゆる様式によって書かれています。いずれも科学論文としての記載はなさそうです。このことは、本書の性格上、特に注目すべきこととして、あらかじめ強調しておきたいと思えます。

## (2) 聖書解釈における問題点

このように、聖書は様々な文学様式で書かれています。ある様式で書かれていながらも、あたかも別の様式で書かれているかのように読むと、大きな間違いを冒す危険性があることに注意することが必要です。

いわゆるカテゴリー錯誤と言われるもので、その例をいくつか上げてみたいと思えます。

ルカによる福音書16章1〜13節に、ある金持ちの金を不正に使った「不正な管理人」を、イエスが褒めたという話があります。それをそのままに受けて、不正をしたらどうなるで

しょうか。もちろん、罪を犯し、それなりの罰を受けるでしょう。この話は前にあげた文学様式で言えば、「譬え話」のジャンルに属するもので、その奥にある真理に目を向けなければ、とんでもないことになるという、誰にでもわかる典型的な例といえるでしょう。

また、神がアダムのあばら骨からエバを造ったという記載を見て（創世記2章21節）、「聖書はやはりすごい。現代におけるクローム技術を既に神は見通していたのだ！」と、感心するとしたら、やはり、この物語の本質を見落とすことになるでしょう。聖書は、現代の医学をあらかじめ示している科学論文ではないのです。このことの意味は、後で詳しく述べたいと思います。

これらは、笑って過ごすことができる例ですが、深刻な例としてガリレオの地動説に関わる宗教裁判があります。

地動説は、発表された当初は、あまり批判されることもなく、キリスト教の世界——とは言っても当時のことですからカトリックですが——で、受け入れられていたようです。しかし、周知のようにガリレオは宗教裁判にかけられてしまいました。

このことについて、ガリレオ自身が、当時、カトリック内部にあった抗争、さらに悪いこ

とには、丁度その頃に勃興を始めたプロテスタントに対する、カトリック側の対抗心に巻き込まれてしまい、このことが、その背景として指摘されています。<sup>(注2)</sup>

だが、それはそれとして、その宗教裁判で引用された聖書箇所は、詩編第96編10節の「国々にふれて言え、主こそ王と。世界は固く据えられ、決して揺らぐことがない」という箇所でした。つまり、この箇所を字義通りに解釈して、地球が動くなどもつてのほか、聖書を冒瀆<sup>ぼうとく</sup>しているとして、彼は糾弾されました。しかし、同じ詩編96編の後半部分において、「野とそこにあるすべてのものよ、喜び勇め。森の木々よ、共に喜べ」とあるように（12節）、この詩編は、神を賛美する歌なのです。

これも、本来、讚美歌であるはずの詩編を科学書とみなした結果、つまりカテゴリー錯誤によって引き起こされた悲劇でした。このことをもって、当時の教会は、ガリレオという天才はもとより、天文学という科学まで裁くという大きな間違いを犯してしまったのです。このことは、その後の科学とキリスト教の間に、深刻な禍根を残したことは、言うまでもありません。

教会でよく聞く言葉の中に、「聖書は、書いてある通りに読むべきで、解釈すべきもので

はない」というのがあるのではないだろうか。

しかし、聖書は、そもそも旧約聖書はヘブライ語、新約聖書はギリシア語で書かれており、私たちが手にして読んでいるものは全て誰かの翻訳によるものであり、そこには既に、翻訳を通しての解釈が入り込んでいます。このことは、日本語訳でも、文語訳、口語訳、新改訳、新共同訳、聖書協会共同訳など、多くの聖書訳があり、それらは、異なつて翻訳されていることから明らかでしょう。もちろん、権威ある聖書は、その時代、時代において、最高の聖書学者の解釈・合意のもとに翻訳されていますが、その解釈は、言語学の発展やその他の古代資料の発見などに応じて時代によつても変化しているのです。

それは別としても、例えば、創世記第1章では全ての被造物が創られた後に、人間が創られたとあるのに対して、創世記第2章では、人が創られる前に「地上にはまだ野の木も、野の草も生えておらず」、また、人が創られた後に、「野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥」を神が創つたと、創造の順序が逆になっているのは、どういふことなのでしょう。

また別の例では、創世記1〜2章から推察するに、アダムとエバは神によつて創られた最初の人間であるにもかかわらず、2章24節で「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ば

れ、二人は一体となる」と、あたかも二人には父と母があるように書かれているのはどういふことなのでしょう。

これらについて、解釈なしでは、とうてい理解することはできないでしょう。

このように、聖書には、書いてある通りに読むことができない箇所があふれています。そして、イエスご自身が、字義通りに受け取ることによつて間違いを犯すことがあることを警告しておられるのです。それは、マルコによる福音書2章23〜28節に記されている、次のような箇所です。

イエスが弟子たちと麦畑の中を歩いている時でした。お腹が空いたのでしょうか、弟子たちが、歩きながら麦の穂を摘みはじめました。その日は安息日でした。それを見たファリサイ派の人たちが、このことは律法にある安息日の規則違反だとしてイエスに訴えたのです。イエスはどうか答えられたでしょうか。「安息日は人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」と、逆に、彼らを厳しく咎められたのです。

このように、イエスご自身が、律法のような基本原則でさえも、文字通りに解釈してはならないと、厳しく戒められているのです。

これらの事柄からも分かるように、聖書は、そこに書いてあることの背後に隠されていることについて、深い洞察と解釈を私たちに要求しているのです。

### (3) 科学の進歩と聖書理解

中世まで聖書解釈は主に、古代ギリシアやローマで使用されてきた四頭立ての戦車から取られたクワドリガと呼ばれる、次に示す四つの方法によってなされてきました。

- ・ 字義的方法 —— 聖書に書いてある文字通りに解釈する。
- ・ 寓喩的方法 —— ある事柄を、教理について語っているものとして解釈する。
- ・ 転義的方法 —— ある事柄を、文字通りあるいは標準的なものとは別のものとして、解釈する。
- ・ 終末的方法 —— ある事柄を、黙示的なものとして解釈する。

今まで語ってきたことから、聖書が一筋縄ではなく、単に文字通りに解釈できないことはおわかりになったことと思います。従って、字義的に解釈できない場合には、右に述べた他

の3つの方法で解釈することになるでしょう。

寓喩的方法とは、比喩的方法と言い換えることもあります。典型的には、聖書で多く語られる譬え話が使われるでしょう。転義的方法としては、ヨハネによる福音書2章1〜12節で、イエスによって、水がぶどう酒に変えられた出来事などがあげられるでしょう（このことについては、後で詳しく述べます）。終末的方法とは、未来のできごと、特にこの世の終末のときの有様についての隠されたできごとを、象徴によって語る、聖書において独特な方法で、ヨハネの黙示録などがこれにあたります。

しかし、中世以降、自然科学が進歩するに従って、このような従来からの聖書解釈は、深刻な問題に直面するようになってきました。その代表的なものが、デカルトによる「機械論的世界観」と、それに基づいて発展してきた科学技術文明、そして1859年のダーウィンの進化論ではないかと思えます。

近代哲学の祖として知られるデカルトは、解析幾何学を考案した大数学者でもあります。彼は、ニュートンが万有引力の法則を発見する前の1637年に「方法序説」を著しましたが、その中で、自然の本質は数式によって表現された法則によって機械的に把握されるとす

る、「機械論的世界観」を提唱しました。その後、ニュートンが見出した地上における運動を支配する万有引力の法則は、天体の運動においても適用可能なことから、地動説と相まって、宇宙は一定の法則で動く巨大な機械であるとする考え、つまりデカルトが提唱した「機械論的世界観」を強力にサポートするものとなりました。

デカルトはフランス人で、イエズス会の学校で信仰の合理的正当化と体系的提示を目指すスコラ哲学を学びました。哲学者の梅原猛は、88歳の時、彼の50年にわたる長い日本文化研究の集大成と彼自身が位置づけている『人類哲学序説』（岩波新書、2013）を著しましたが——彼は、その「あとがき」で、これはあくまでも「序説」であり、「本論」を書くつもりであると記していましたが、残念なことに、「本論」の完成を待たずに、2019年に、94歳で亡くなりました——、その中で彼は、理性を最高とするデカルトの哲学は、ソクラテスやプラトンなど理性を重んじるギリシア哲学とキリスト教が結びついたもので、キリスト教に関して言えば、創世記1章26節の「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう」にある「神の似姿」を「理性」と解釈し、よって、人間は他の被造物に対して、神から特別の地位、つまり、それらを支配する権限が与えられたということを、その基礎にしていると、述べています。

人間を特別視して、他の被造物を思いのままに支配するという考えは、何もデカルトに限らず、中世以降のキリスト教において広く行き渡っていました。このような考えは、近世以降のヨーロッパにおける主流思想である、合理主義、人間中心主義、技術至上主義へと繋がり、現在の豊かな物質文明の恩恵に私たち現代人は与っている訳ですが、他方では、梅原も指摘しているように、それから生じた地球環境問題は、今や、抜き差しならない状況になってきています。

ここで、私が強く主張したいことは、聖書の解釈が、科学の発展と共に、哲学はもとより現代の環境問題のような大きな問題に結びついていくということなのです。このことについては、聖書の全体を俯瞰することなく、「神の似姿＝理性」として単純化し、また、被造物に對する「支配」が、あくまでも「神の意図に従った支配」であることへの省察に欠けていたことが大きな要因としてあげられると思います。このことについては、第4章でさらに詳しく見ていきたいと思います。

ただ、地動説や万有引力の法則、さらにビッグバンを含む物理に関わる諸々の法則は、聖書と矛盾・衝突するどころか、神による天地創造の秩序がいかに素晴らしく、完璧であるか

という例を提供するものとして、現在、大方のクリスチャンにおいては、素直に受け入れられています。多くの宇宙飛行士が、宇宙にあって、その崇高さの中に神を見出したと語っています<sup>(註)</sup>が、詩篇作者も「主よ、わたしたちの主よ、あなたの御名は、いかに力強く、全地に満ちていることでしょうか。……あなたの天を、あなたの指の業を、わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの」と、満天に輝く星と月を、深い感動の中で仰ぎ見上げました(詩編8編2〜4節)。彼らは、神の創造の業の中に、自分たちに継続して今も注がれている、神の愛と慈しみを感じ取ったのです。

それでは、ダーウィンの進化論はどうでしょうか。1859年にダーウィンが『種の起源』を発表して以来、既に一世紀半以上も経過していますが、多くの世論調査によれば、アメリカでは、現在でも人口の約三分の一にも上る人が、進化論を信じていないとされています。そして、進化論を学校で教えるべきかどうか、過去において何度も裁判で争われたそうです。

実際、ケンタッキー州には、まさに、創世記に書かれている通りに天地万物が創造され、それは科学的にも実証されているとして、進化論を完全に否定する立場に立つ創造博物館があるそうです。そして、多くの見物客であふれていることが、様々なメディアで報道されています。そこでは、地球は約6000年前に誕生したとして、人間と恐竜が共存する様子などが、リアルに展示されているということです。現代の科学によれば、地球は約46億年前に誕生し、恐竜は約6500万年前に絶滅し、現代人としての人間は約20万年前に現れたとしており、この博物館の主張とは、天と地ほどの大きな違いがあります。

#### (4) 進化論はなぜ受け入れられ難いのか

アメリカ人の多くが進化論を信じない——信じたくない——理由は、主には、進化論が聖書の冒頭の創造物語を始めとして、旧約・新約を通して、聖書の中で一貫して流れているキリスト教の主張と一致しないことによると言われています。しかし、アメリカだけではなく、たとえ進化論を、科学的な理論として認めたとしても、どこか割り切れない思いを抱いているクリスチャンが、日本を含めて世界にも多くいるのではないのでしょうか。

クリスチャンが、なぜ進化論を素直に受け入れることが困難なのか、もう少しその理由を掘り下げていくと、大まかには、次のような事柄に集約されるように思われます。



- ① 進化論は、「偶然」によつて支配される「突然変異」に基礎を置いている。
- ② 進化論は、人間と動物には生物学上、基本的な差異はないとしているので、神の創造の極みとしての人間、そしてその固有性に疑問を投げかける。
- ③ 「適者生存」の考えは、弱者切り捨てを支持する。
- ④ 進化論は実験によつて検証することができず、あくまでも「仮説」である、等々。

要するに、これらのことは、森羅万象、全てにおいて神の主権を主張する聖書の教えに反しており、さらにまた、キリスト教倫理とも相容れないように見えるからでしょう。そして、その根本には、進化論は「仮説」にしか過ぎないという考えがあると思われれます。

私自身について言えば、人生の大半を化学という学問分野の研究に関わつてきた科学コミュニティーの一員として、また、聖書の言葉を信じる一人のキリスト者として、ここに掲げたような進化論にまつわる疑問は、私にとつても未解決の問題として、あたかも喉に刺さつたトゲのようにして私の心を痛めるものでした。別の言葉で言い換えると、晴天——聖書

の福音——にかかると一朵の黒雲のように、どこか、いつも私の心の片隅に暗い陰を投げかけていたと言つてもよいかもしれません。

この問題に関して、何らかの解答を得たいと思つて、いろいろと書物を調べました。その結果、これまでの議論が、進化論は、聖書の記述に反する間違つた「仮説」であるとして、聖書をそのまま信じることを強く主張する一部のクリスチャンと、他方では、聖書は、進化論びいては科学に相反しているので、聖書は信じるに足るものではないとして、キリスト教そのものを否定する無神論者によるもので占められていることが分りました。

これらの議論の行き着くところは、進化論と聖書を同時に信じることは到底あり得ず、よつて、もしもそのような者がいれば、彼は愚かな者ということになるわけです。

科学における新しい発見や新しい理論は、それが偉大なもの、そして革新的であればあるほど、大きなインパクトを社会に与えます。そして、その優れた科学理論を、「主義」や「イズム」のように、哲学を含めたあらゆるジャンルのセクターが、それぞれ自分たちの考えやイデオロギーに都合がよいように解釈し、あるいは加工して、それらの主張の正当性を支える根拠として利用することは、しばしば目にするところです。いわゆる我田引水と呼

ばれるものです。

ダーウィンの進化論も、まさにそのような運命を辿ってきました。マルクスのような共産主義者が、階級闘争と、その結果として起こる革命の正当性の根拠として進化論を引用していますが、共産主義と全く対立するロックフェラーのような資本主義者も、大企業が市場を支配するのは、「適者生存」の進化論に適っているのだと主張しました。重篤な障害者を抹殺しようとする優生学、あるいは人種差別主義、国家主義的な純血思想なども同様です。ヒトラーのユダヤ人虐殺のホロコーストは、まさにその頂点と言ってもよいでしょう。もちろん、無神論を主張する人たちも、その多くが進化論をその根拠にしています。

この対極にあるのが、先にも述べた、聖書をそのまま字義通りに読むことを主張するクリスチャンの中でも、特に進化論を明確に否定する考えに立つ人たちです。

一見、これら二つの立場からの主義主張は、相反するように見えますが、結局のところ、その根は同じであり、後で詳しく述べるように、いずれも進化論、そして聖書がある種の根強いバイアスをもって理解していることによるものなのです。

本来、科学はそれ自体で成り立っており、哲学を含めてあらゆる思想や主義主張に対して

無関係、ニュートラルです。

酸素(O)と水素(H)が反応すると「水(H<sub>2</sub>O)」になり、さらに、「水」は百度に熱すると沸騰して蒸気になり、零度に冷やすと氷になります。科学としての「水」そのものは、それ自体、あくまで無色透明で、そこには何の思想、主義主張もありません。

だが、無色透明の水も、色材を加えると赤い水、あるいは黒い水になり、清澄な純水も、泥を混ぜると泥水になるように、本来、純粹に科学的な理論も、それを利用する者の意図に応じて、いかようにもなるのです。

ダーウィンは、進化論を純粹な科学理論として発表しましたが、先にも述べたように、科学以外の様々な分野にある、それぞれのセクターにおいて、その思惑に応じて勝手気ままに濫用されており、言わばこのように様々な手垢で真っ黒に汚れた進化論が、科学コミュニケーションの外では、進化論として大手を振って闊歩する事態になっているのです。

このように混乱した進化論をベースに、「ダーウィン主義」や「反ダーウィン主義」が、互いに反目し合っている有様です。天国のダーウィンも、目を白黒させて、さぞかし困惑していることでしょう。ダーウィン自身、彼の考えは厳密に生物学的理論であり、さらに、この考えはいかなる宗教的意味合いを持つものではないとして、あらゆる懸念を和らげることに

心を砕いていたとされています。

聖書は、進化論が発表される前から多くの人が信じており、また発表後においても、そのことに変わりはありません。聖書は、そのような理論に振り回されるほど脆弱ではなく、神は、進化論の有る無しに関わらず存在するのです。ビッグバンによって宇宙が誕生する以前から、そして、この世界の全てが終わった後も、神、そしてその言葉は、永遠に続くのです。しかし、だからと言って、聖書と進化論について言わばタブー視して、今あるこのような状態をそのままに放置しておく訳にはいかないことは明らかでしょう。

### (5) 創造論か進化論か——我々は選択しなければならないのか

ここで「創造論」という用語を使っていますが、私たちは、用語の使い方には注意を払う必要があります。なぜなら、クリスチャンは、誰でも皆、聖書の冒頭にあるように、天地万物が神によって創造されたことを信じています。よって、創造論はクリスチャンにとっては至極当然で、ここで改めて問われるまでもなく、選択の対象にはならないからです。わざわざ括弧を付けて「創造論」と書いたのは、そのような意味での創造論ではなく、天地万物の創造が、まさに聖書に書いてある通りの方法でもって、その期間についても7日間を終了し

たと主張する人たちがおり、彼らのそのような主張を指しています。

このような「創造論」は、138億年前にビッグバンによって宇宙が誕生し、そして46億年前に地球や月を含む太陽系ができた後、その長い期間にわたって生命が進化したとする「進化論」と明らかに対立するものです。

私は数年前に、東京バプテスト神学校で、「組織神学」の講義を受講しました。そこで使用されたテキストは、オックスフォード大学の教授で、今日の代表的な神学者と言われているアリストアー・マクグラスという人が書いた『キリスト教神学入門』と題する本でした。大部のその本は、神学に関わる古代からのあらゆる主要な論争を網羅しており、大変貴重な労作です。もちろん「科学と宗教」についても、歴史的な考察も含めてページが割かれていますが。しかし、私にとって残念だったことは、進化論に関しては、いくつかの議論が簡単に紹介されているだけで、深い考察を見出すことができないことでした。

著者プロフィールから、マクグラスは神学者ですが、元々は分子生物学の博士号を有する科学者であることが分りました。このテキスト以外にも、『科学と宗教』と題する本を著しており、私は、この著書において、前にも述べた私の進化論に対するわだかまりは雲散霧消

するものと期待して、早速に購入し、隅から隅まで注意深く閲読しました。しかし、進化論に関する限り、先の組織神学テキストから一步も前に出るものではありませんでした。その後、いろいろな文献を調べてみましたが、私のわだかまりを払拭するものに出くわすことはできませんでした。

では、キリスト教主流を占めるカトリックやプロテスタントの各教派は、この問題に関して、なぜこのように口を閉ざしているのでしょうか。ガリレオ事件に懲りて、科学と聖書は別物であるとして、進化論に対して距離を置いているのかもしれない。

だが、その間にも、無神論を唱える人たちが進化論を楯にとつてキリスト教を愚かな宗教だと攻撃し、他方では、聖書を字義通りに読むことを強く主張する人たちが進化論を否定するという狭間で、神を信じる多くのキリスト教徒が困惑の中にいるのです。そればかりではなく、学校で進化論を学んだ若い人たちが、キリスト教に関心を持っていながらも、キリスト教は、進化論、ひいては科学と相容れないおかしな宗教だとして敬遠するしたら、キリスト教コミュニティとしても、われ関せずと腕を組んで見過ごすわけにはいかないでしょう。

進化論に関して言えば、数十年前までは、地中から掘り出された化石などが主な証拠で、確かに不確かな部分が、少なからずあったことは否めません。加えて、進化論と聖書の関係について論じるためには、生物学や地質学などの専門的な科学知識を兼ね備えた神学者が不可欠であり、このような神学者がいなかったことも、キリスト教コミュニティにおいて、この問題がこれまで敬遠されてきた大きな原因の一つではないかと思われまます。

そのような背景の中、分子生物学、特に遺伝学、ゲノム学の最近の進歩は目を見張るばかりで、進化論も地中から見出された化石や、従来の生物学の枠を超えて、分子生物学の立場から格段と明確になってきました。周知のように、イギリスのケンブリッジ大学は自然科学、人文科学をはじめとして、各界に多くの知的巨人を生み出してきた世界屈指の名門大学です（ここで取り上げたダーウィンやニュートンもケンブリッジ大学出身です）。この大学は31にも上るカレッジからなっていますが、それぞれが独自のチャペルを持っており、神学がそれぞれの学問分野に深く関わっていることが窺われます。さらに、このケンブリッジ大学には、「ファラデー科学と宗教研究所」（ファラデーは、電磁気に関する「ファラデーの法則」で、中学の理科でもおなじみの物理学者です）という、科学と神学の橋渡しをする研究所があります。この名誉所長であるデニス・アレクサンダー教授は、遺伝学、ゲノム学に造詣が深い、分子生物

学分野における著名な学者ですが、それと同時に、神学者でもあります。アレクサンダーは2008年に、『創造か進化か——我々は選択しなければならぬのか (Creation or Evolution: Do We Have to Choose?)』を著しましたが、この本は、まさに進化論と聖書の関係に、科学とキリスト教神学の立場から、深い洞察によるメスを入れた最初の本と言ってもよいかと思えます。私は、前にも述べたように、この問題についてかねがね深い関心を持っていたところ、ある出来事を通じて偶然に本書と出会い、大変感銘を受けました。そして、ケンブリッジでアレクサンダーと直接にお話をし、いろいろなことを学ぶ機会を得ることができました。

この本の中で、アレクサンダーは分子生物学者として、まず最初に、先にも述べたように、様々な主義主張によって真つ黒に染みついた、進化論にまつわる手垢を丁寧に洗い落とし、純粹な科学理論としての進化論をあらわにしていけます。その過程の中で、進化において中心的な位置を占める「変異」は、一般に信じられている、「偶然」に支配された「突然変異」だけではなく、様々な変異があること——しかも、その大部分は生命の仕組みそのものに由来する——を、明らかにします。そして、進化が、それらの変異のうちで、その生命体の繁殖に繋がるものだけが選択されて次世代に引き継がれ、また別の場合には、その時々地球の環境変化に対して、それぞれの生命体が驚くほど見事に順応して、今日の生物の多様に繋がっていったプロセスであることを明らかにします。

そして、神学者として、進化とは、昔も、今も、そして未来においても、昼も夜も休むことなく働く神の御業のプロセスであることを明らかにします。

まさに「目からうろこ」、私はこの本によって、先にも述べた進化論に対する長い間のわだかまりが、すっきりと消え去り、そして、進化論と聖書を同時に信じることは、決して矛盾することではなく、進化論の中にも、汲んでも尽きることがない豊かな福音の秘密が隠されていることを知り、深い驚きと感銘を禁じることができませんでした。

まさに真理は、地動説がそうであったように、聖書を貶めるところか、その素晴らしさに別の観点からスポットライトを当てて、聖書をさらに深く理解することを助けるということに、改めて気づかされた思いがいたしました。

この本は、日進月歩で発展する分子生物学に合わせて、2014年には大幅に改訂され、その改訂版を私が翻訳し、その翻訳書が、『進化か創造か——我々は選択しなければならぬのか』(ヨベル、2020年)として日本でも出版されました。本書は、アレクサンダーの

この本に触発されて書かれたものです。従って、基本的には、彼の考えを引き継いでいます。余りにも多く引用しているので、それらの一つ一つを引用として明示していません。しかし、私自身の考えの文脈の中で引用している部分も多くあります。いずれにしても、本書における内容については、著者である私自身に全責任があることはもちろんです。アレクサンダーの本は、かなり分厚い本ですが、それだけに、進化と創造の関係が、いろいろな観点から詳細に論じられているので、より詳しくは、アレクサンダーの本へと進まれることを、ぜひともお勧めいたします。

【書評再録】

デニス・アレクサンダー著 小山清孝訳 創造か進化か―我々は選択せねばならないのか

西南学院大学神学部教授 濱野道雄

創造か進化か、という問いに対して、原理主義的な信仰をもつ人は「創造だ」と言うでしょうし、リベラルな信仰を持つ人は「二つは関係ない」と言うかもしれません。T・ピーターズの言葉を借りれば、前者を神学と科学の「戦闘モデル」、後者を「別居モデル」と、この両方を越えていく「仮説上の一致」モデルを、つまり同じ一つのまだ見ない世界を探し求め、具体的な倫理課題を共に考えるための対話関係にある創造論と進化論のあり方を、本書は丁寧に解き明かしてくれそうです。

このような現代における神学と科学の対話は、現代物理学と神学の関係から始まり、T・F・トランスやA・E・マクグラスによるリベラル神学からではないモデルが日本にも紹介されています。ただ神学者の間でも教会でもこの議論は十分には広がっておらず、その結果、重要な生命倫理や環境倫理、また自然災害やパンデミックにおける課題を十分に考察し、言葉にできていないのではと危惧する場面が残念ながら度々あります。今回、その中でもあまり日本語で読むことができなかつた分子生

西南学院大学神学部教授 濱野道雄

物学分野と神学の対話を記した、イギリスの分子生物学者にして神学者のデニス・アレクサンダーの著書が、やはり科学者である小山清孝氏という最適な訳者を得て日本に紹介されたことを嬉しく思います。

保守層もリベラル層も「その人のDNAは不動で、人格を決定する」という思い込みから議論しがちですが、それが誤りであることを本書は証示してくれます。そして事実「進化」というより「多様化」であることが示されており、私は福音的な解放感すら得ました。つまり、体内でDNAは毎分何千キロと複製される中で常に多様に変化したものも生まれ、子どもは両親とも持たないゲノム配列をも持つて生まれます。その後「自然淘汰」ではなく、繁殖が続いたものが次の世代になる訳で、人間にとってそれはイエスの愛の教えに従って福祉や医療がいかに行われるかにかかっていると言うのです。そのすべてのプロセスに神が共にいることと著者は信じ、語ります。

イエスが示した神の国は異なるものが共に生きる世界であったことを思いますし、多様化のプロセスで生まれるすべての被造物と共に生きる人間の環境倫理を、またそのプロセスは「偶然」というより神の物語で導かれるべきだということを、信仰者として思います。世界がパンデミックにある現在、慰めと希望をその言葉に見もします。

本書は専門的な知識も多く、読者によっては難しく感じるかもしれませんが。現代物理学と信仰につ

いては、例えば三田一郎氏の『科学者はなぜ神を信じるのか』（ブルーバックス新書）など平易に読めるものもあります。分子生物学版の同様な書を、訳者が出版されることを一読者として望みます。

(キリスト新聞2020年4月11号)